

日 本 語 を 考 え る 学 習

高 見 よ 志 子
夷 藤 保
鈴 木 明

1. はじめに

言語教育の検討が唱えはじめられて久しい年月が経過しているが、未だに十分な認識がなされていないのが現実ではなかっただろうか。昭和56年度から実施された学習指導要領（国語科）に於いて、「言語事項」という新たな領域が、「表現」・「理解」の領域と同列に記載されている事実は、上記の現状認識にもとずくことがらとして考えることができる。従来、「ことばに関する事項」は、「聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと」の4領域に比して、基礎的なものと位置づけられながらも、実践の場ではいわば付属的な事柄として認識されている傾向にあったと考えられる。この点のみに限って言えば、近来、言語に関する世間の認識は一步前進して来たかのように見られる。しかし、私たちにとっては、それだけでは済まされない問題がある。それは日々の実践における言語教育を、より正確に豊かなものにするために、さまざまな課題を克服しなければならないということに他ならない。

2. テーマについて

前年度からひきつづき、「日本語を考える学習」というテーマに基づき、研究及び実践を進めてきた。それによって、日本語を指導することの難しさをますます痛感するとともに、日本語の世界がもつ広がりと深さに改めて気付かせられた次第である。

日本語の学習というのは、日本語に関する知識をふやすことではない。言語というものは、単に知識の対象ではなく、必要不可欠な生活道具であり、また「考える」ための重要な媒体であるはずだ。特に「考えるための道具」という観点から、わたしたちは日本語の学習をとらえていくことにした。そして、日頃習慣や常識として扱ってきた「ことば」というものを、ここでもう一度客観的に見直してみることになった。たとえば、ひとつの言葉がもつ意味の広がりや、ことばの世界における法則性などを、知識として教えるのではなく、自ら考え、自ら発見していくような指導をしなければいけない。そうすることで、言語を表面的な理解にとどめることなく、その本質を理解しようとする姿勢が生まれてくるはずだ。習慣や感情に従った言語生活ではなく、知的理解に基づく言語活動を営むことで、わたしたちは日本語への興味・関心・能力をより高めることができるだろう。そのためにも、わたしたちは生徒により楽しく日本語を考えるような工夫を凝らさなければいけない。良い教材の精選や適切な学習指導法を見出すことなどが、当然必要となってくるわけだ。

これらの研究は今、端緒についたばかりで、まだ十分な成果を得てはいない。しかし、今年度もこのテーマによる研究・実践を継続したことによって、少しずつではあるが私たちの意図が生徒に浸透しつつあるように思われる。

3. 今年度の経過

今年度は各自が前年度の内容をふまえ、さらに各学年の使用教材、及び言語教育の系統性なども考慮した上で、次のような研究及び実践を進めてきた。

- (1年) ことばの意味——辞書の意味と場面的意味、感情的意味
方言
- (2年) 多義語
慣用句
- (3年) 「ない」ということ ——否定について
敬語

また、授業の進め方としては、次の三点を基本の姿勢にしようと了解し合った。

- ① 独立単元を組む、すなわち読解的な指導、または読解の一部に組み込まれる形態を避ける。
- ② 教科書の記述に密着せず、生徒に新鮮な資料を与えて学習意欲をよびおこす工夫をする。
- ③ 生徒なりに充分思考して日本語を分析できるような授業を工夫する。

今後は教師が課題提起をするのみではなく、生徒から自発的に出された素朴な疑問を材料にして、これを広め深めながら「日本語を考える学習」を進めていきたい。そして新しい分野の実践を発展的に手がけると同時に、各課題が言語教育の体系の中でどのように位置づくかを考慮し、また三年間の系統性といった面についても十分に検討していきたい。

以下は、本年度に試みた学習記録である。未熟な点も多々あると思われるが、公表を契機として批判を仰ぎ、さらに今後の研究の糧にしたいと考えるものである。

実 践 例 ① (1年の授業から)

1 題 材 「方言」を考える。

2 目 標

- 方言について理解させ、言語生活に対する考え方を深めさせる。
- 身近な地域の言語生活の中から題材を求め、考えをまとめて、発表したり話し合ったりすることができるようにさせる。

3 指導の観点 言葉は民族の生きた文化である。古くから生活の中に生きてきた言葉には独特のよさ・美しさがある。地域で使われる方言の中にもそうした言葉が少なくない。

方言をはじめ、わたくしたちが日常使っている言葉について、改めてふり返り、考えてみよう。

- 上記は、教科書(光村・国語一)第四単元「言葉と生活」の前書きに述べられている内容である。「日本語を考える学習」の一環として、方言をとりあげる理由が明確に表現されていると思われる。生活に最も密着した言語として使用されている方言は、しかし、共通語や書きことば中心に展開される

国語科の中では、ともすれば意識されずに過ぎてきたように思われる。方言を使用する場面と、共通語を使用する場面、わたくしたち日本人は二重の言語生活を行っているわけである。地域の方言は学習の場を経なくとも自ら機能しているがゆえに、空気のような存在であるとも言えよう。それにスポットをあてることは、方言そのものの認識を深めると共に日本語全体の相を認識することになると思われる。

- 教科書の教材は、読みとりを主目的とするのではなく、自分たちの方言を見なおすための参考資料として扱いたい。幸い、詩人・川崎洋氏の文章「方言の息づかい」は、各地方に残る生活言語のもっている響き・よさ・美しさを愛着をこめて随想ふうに表示したものなので、これを導入として扱い、方言を再認識する契機としたい。

また、方言が地理的・歴史的なものの所産であることを、徳川宗賢氏の解説文と方言地図の読みとりから理解させたい。これも常に自分たちの方言とのかかわりを密にして扱いたい。

- 現実の生活の中から方言を主体的にとりあげて、自分の生活の中で考え、肌で感じた感覚を大切に分析や感想を持つようにしむけたい。グループ活動と発表の形式が良いと思われる。

学級の中にはいわゆる転勤族がいたり、両親が他県出身であったりする生徒がいる。校下も全県的であるため、金沢との比較もできる状態にある。これを活用することによって生徒の興味や関係を深めたい。

4 指導計画

- (1) 「方言の息づかい」を読んで、方言や古い言葉の良さについて考える。 (第1時限)
 - a 「おひなりあんしたか(およりになりあんしたか)」「お静かに」という言葉(岩手)をなぜ筆者はとりあげたのだろう。
 - b 「げに・まっこと・……こじゃんと」(高知)をなぜとりあげたのだろう。
 - c 自分たちの身近な方言について、筆者のようにとりあげてみたい語を集めよう。(10語程度・次時まで一覧表にしておく)

こ と ば	とりあげる理由・感想

- (2) 方言について具体的に検討・発表するための話し合いをする。 (第2時限)
 - a 第1時Cの課題をグループで検討し、発表する語を3～4語にしぼる。
 - b 発表内容をきめ、発表の分担をきめる。
- (3) 発表と質疑応答 (第3～5時限)
- (4) 発表のまとめ……各自1語をとりあげて「方言の息づかい」を参考に文章化。(課題)
- (5) 方言の発生を理解する。 (第6・7時限)
 - a 「砂糖の味をどう表現するか」(徳川宗賢)を読む。

- b 中央から地方へ同心円状に伝播する基本法則が、自分たちの方言と、どのように、
かかわりがあるか確かめる。

(6) 全体のまとめ

5 学習の記録

〈第1時限〉の課題から

(T・N女)

言 葉	理 由 ・ 感 想
いじっかしい	自分の身にいやなことがかぶさってきたり、めんどうなことがあったりしたときに、「いじっかしいなあ!」と言います。「めんどう」という気持ちがよく伝わってきて、私はよく使います。
ぬく い	「あったかいなあー」と思ったとき、たとえばこたつに入った時などに「あーぬくい、ぬくい」と言います。この言葉をきくと、いなかのあたたかさみみたいものを感じます。
ハシカイ	「頭がいい、などというかわりに、「あら、ハシカイ子やねえ」と言います。「ハシカイ」と言うと、なんとなくキリッとしていて、よく頭がまわるというか、そんな感じがします。
カ タイ	「おりこうさん」とか「おとなしい、などというかわりに、「カタイ子やね」と言います。なんでこう言うのか今でもよくわからなくて、昔は「私カタくないよ、やわらかいもん!」などと言ったりしました。

(T・A男)

(K・O男)

行くまっし	人々の親近感などが伝わる。私たちにとってすごく言いやすい。	……しなさいの意でなかなか上品な感じ。
行くまさる	「行かれる」という敬語の意味だがそこに人々の暖かみを感じる。	
……やがいね	相手の言ったこととは違うと言った意味。人の前ではちょっと下品。	標準語で「……でしょう」の意。人に正すはたらきがある。
……や	「…やろ」は「…だろ」 「そうや」は、「そうだ」 「…やから」は「…だから」で共通	「……だ」が変形しているように思う。

〈第3～5限〉

グループの発表に際しては、次の点に留意した。

- ・ 単語・語法・あいさつことばなど、発表は多方面にわたるが、しいてその区別、とくに品詞の確認などはしない。
- ・ 共通語ではどの語に最も近いのか、使用の場面を具体的に説明する。
- ・ 語源が考えられるか。
- ・ その方言についてどんな感想をもつか。
- ・ 学級の何人が、そのことばを使っているか、あるいは耳できくだけの方言かも必要に応じて調べること。

各班は話し合いの結果を次のようにメモし、発表した。

(B
1
10)

班員 小林、菱師、清水、松田

○なんば

・七味とうがらしのこと

(例) なんばをかつきつ

○南蛮からきた

現在では富山・福井・青森・鳥取
などでもいう

○ごぼる

○雪の中に足がはまること

(例) 学校へ行く途中ごぼった

○雪の中に足がはまったときの音から

○まじごたん

○「こんにちは」のこと

(例) 近所の人がきて「まじごたん、まじごたん」という

○よく会うから「まじごたん」

(D
1
8)

班員 稲葉、川島、津田、吉岡

○いじつかしい

自分にとって、じゃまな物とか、いやな物が存在した時に使う。

(例) Aは、授業中僕にやたら話しかけてくる。

かまんるきなくたので、怒りす「えー

いじつかしいなあ」と言ってしまった。

失通語……じゃま、しつこい

○なんもヤ

存在を否定するときに使う

(例) 甲「次、ちゃう字のへん、まへんやったけ」

乙「なんもや、さんずいへんせぞ」

失通語……ちがいますよ、もうじゃないですよ

○……んねえか

会話の最後に、問いかける時に使う。(主客)「へはっせう」とそのこと区分かているときにもわざと使う

(例) 日は、けんかの時すぞ、「だらんねえか」というので、

あいつはきりいだ。

失通語……じゃないか？

〈ぬくとい〉——発表と質疑応答の記録——

- P_H (発表) これは、あたたかいという意味です。「ぬくといお湯」などを使って、本当にあたたかい感じがします。「ぬくい」という人もいます。
- P この辺では「ぬくい」と言うと思います。幼稚園の子が言っている。
- P おばあさんが「ぬくい」というけど、幼稚園児が言うのは聞かない。
- P_H (発表者) 私のうちでは、両親も私も「ぬくい」と言わず「ぬくとい」と言います。
- T P_Hさんのご両親はどちらの出身ですか。
- P_H 長野です。
- P 今、石川県の方言で話をしているのだから、他県のことはおかしいと思います。
- P カイロの名まえにも「ぬくぬく」というのがあるから「ぬくとい」は方言とは言えないのではないですか。
- T おもしろいことになりました。P_Hさん「ぬくとい」ものをもう一度挙げてください。
- P_H ぬくといお湯、ぬくといこたつ、ぬくとい日
- P_T ぼくのうちは「ぬくたい」と言っているよ。(騒然)
- T では皆が何と言っているか調べましょう。寒い日に外から帰ってきて、こたつに入った時、何といいますか。

板 書	ぬくとい	1
	ぬくたい	1
	ぬくい	19
	あたたかい (あったかい)	20

- T 「ぬくたい」と言ってる人、御両親は？
- P_T 石川県生まれでなく両親とも三重県です。うちじゅうみんな「ぬくたい」と言います。
- P ハイ、質問があります。今、辞書をひいてみたのだけれど、「ぬくい」の項目には方言と書いてありません。ぼくは方言だと思うのだけれど。
- (調べると「ぬくい」に方言の意識をもっているものが大部分であった。)
- P (手もとの辞書をひき) この辞書には方言と書いてあるのですが、どうしてですか。
- T 「ぬくたい」「ぬくとい」も調べてごらん。
- (生徒の手もとにある二種の辞書—三省堂・旺文社—を調べた結果を板書)

板
書

ぬく い……方言あつかいの辞書もある。
ぬくとい……どちらの辞書にも方言として載っている。
ぬくたい……どちらの辞書にも載っていない。

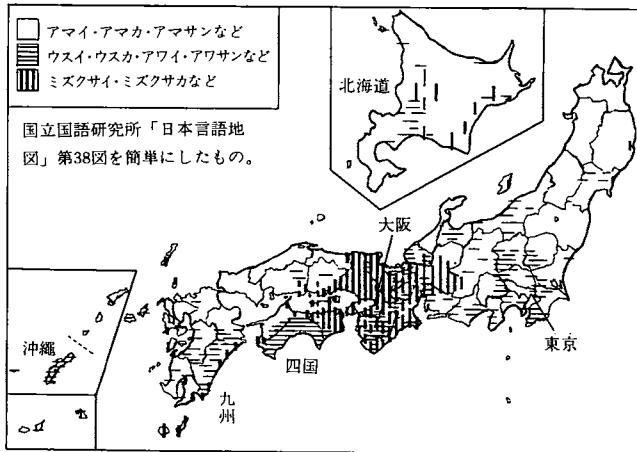
——これをどう考えるか

- P さっきも言ったんだけど「ぬくい」というのは、多くの人が使っているから、もう方言とは言えないのだと思います。カイロのCMにもなるくらいだから。
- P 「ぬくぬくと」という言う方もふつうです。
- P どれも「ぬく」が上にきていて、語尾が違うだけです。
- P 「ぬくたい」と言うのはきっと三重県とか限られた土地に使われているから、わざわざ辞書には書いてないのだと思います。

このように、辞書の比較から、使用範囲について、ぬくい>ぬくとい>ぬくたいの図式を得た。
また「ぬくい」は方言とみなさなくともよいのではないかという見通しを持った。

日本語大辞典（小学館）で調べてみると、「ぬくい」は全国の広い地域にわたって使用されている。「ぬくとい」は茨城・群馬・千葉・長野・岐阜など、関東から北陸にかけて例があり、「ぬきたい」は、三重・京都・和歌山の一部にみられる。

〈言語地図の読みとり〉 ——自分の地域を考える——



左図は、教科書P105
「塩味の足りない汁の味を
どう表現するか」

・疑問点

石川県地方は、アマイ系
になっているが、果たし
てこの学級の実態はどう
なのだろう。自分たちの
言語状況から方言圏論
を確かめてみよう。

T しょう油、あるいは味噌の味が足りないとき、あなたはどのように言いますか。

板 書	(ム)	
	ショモナイ	24
	ウスイ	16
	ミズクサイ	2

この結果と地図とを比べてみて、どんなことがわかりますか。

P 地図ではアマイに入っているが、アマイではなく「など」と書いてある部分に含まれるのだと思います。

P ショモナイは全国でも少ないのではないかな。だから記号であらわれない。

P 隣の福井県・富山県はウスイの印になっているから、方言が同心円状に中央から地方へ伝わる法則から言うなら、石川県もウスイと予想されるけれど、ショモナイが多かったからウスイの中には入れられなかったのだと思う。

T ミズクサイが2人いるけれど、金沢で生まれたの？

P_M 父も母も大阪出身です。ぼくは金沢で生まれました。

ミズクサイと表現するP_KとP_Mの家族は方言地図の示す上方出身であった。P_K・P_Mは授業で問題化するまで、金沢では異なる表現をしていたことに気づけなかった。食生活に関する単語であるため、学校の友達同志の会話にはほとんど出てこない。マス・コミ語彙にもそれはあまりない。味覚を表わすこの基本語彙は、家庭という小集団の中で、両親の成育した地域の単語をそっくり身につけたまま、生活語となったのであろう。さて、この味覚を表わす語は今後どうなっていくだろうか。

P 筆者の考えからおしすすめると、ずっと先にはこの地方もウスイが多くなり、それからミズクサイが広まってくることになる。

P わたしは、そうは思わない。ミズクサイにならず、ウスイになるのだと思う。

P 昔は京都や大阪が中心でそこから広まったかもしれないけれど、今は東京が中心だからミズクサイははやらないと思う。

P でも関西の人までウスイということはない。

〔国立国語研究所「日本言語地図」第38図によれば、石川県は南の山間部一部（ウスイ）を除いて、「ショーモナイ」一色であり、「ショーモナイ」を言う地方は石川以外に見当たらないという特色を持つ。〕

6 生徒の作文から —— 5 のまとめとして「方言の息づかいを参考に書かせたもの ——

（N・M男） しょむない

金沢の方言でよく使われている言葉に「だら」「…しまっし」などがありますが、他にこの「しょむない」を入れてもよいのではないのでしょうか。

一般にこの言葉は、食物を食べて塩味が足りなかったり、その他、味つけがうすいものを、「しょむない」といいますが、友達がつまらない話をする、「しょーもね一話するなや」と使いますし、無愛想な女の子をさして、「なんやあの子、しょむない」とも言います。

つまり、もともと食物の味つけが足りないという意味だったものが「〇〇がない」と、いろいろなものになってしまったのではないのでしょうか。ですから語源は「塩味ない」で、それがだんだん金沢の人のしゃべり方にあったような言い方のショムナイ^(モ)またはショームナイ^(モ)に変わってしまったのだと思います。

ももとは味の話だったのが「ショムナイ〇〇」で意味がとおってしまうとは、とてもおもしろいと思います。

（H・K男） きんかんまなま

これは金沢の方言です。アイスパーン、つまり、凍ってかちかちになった雪の所のことです。金沢で育った僕が知らないで、このごろはあまり使われていないようです。「きんかん」というところはいかにもつるつる、かちかち、という感じがするところで、そんな意味ではないのでしょうか。「まなま」という所はいかにも新鮮な、というような意味のようです。アイスパーンにくらべて、とてもおもしろいひびきを持った言葉だと思います。

これをみても、方言などでも、美しいひびきをもった言葉があり、今ではみんな新しいものばかり求めるが、古い物でも言葉にかぎらず、いいものがあるんだな、と思った。

（K・K女子） ひらがりさっしやいの

私の生まれた地方、大聖寺の方面では、金沢とちがった言葉がたくさんあります。

大聖寺といっても、町の中ではそうみんなは使いませんが、祖父のお里の三木という村の方へ行くと、いろいろな言葉が先輩の方々の間でかわされています。そこへ遊びに行ったとき、とても優しい言葉を耳にしました。

「ひらがりさっしやいの」という言葉で、ちょうどお昼ごろにまだ仕事をしている人をみかけてかける言葉です。

ひらがりというのは「ひら+がり」で、「ひら」というのは昼、「がり」は、あがり（上がる）の意味です。「さっしやい」は、しなさいということです。ですから、田んぼなどでまだ仕事をしている人を見かけて、「もうお昼まじかですから、「田んぼからあがって、お昼御飯にしな

さいというのと同じ意味なのです。

「しなさい」と言うよりも、「さっしやいの」という方が相手の気持ちをくんだ、あたたかみのある言葉に感じられます。

(M・S女子) **ためらいなれ**

これは岐阜に住んでいる祖母が使う言葉です。岐阜といっても飛騨の山奥の地方だけの言葉で、岐阜市内に引越した祖母はここでは通じないからといって使っていません。

「ためらいなれ」とは、「気をつけなさい」という意味です。例えば、客が帰る時、「ためい
なれやあ」「ためらいなって帰られやあ」といって見送るのです。それから「おためらい」
という時もあります。父親が山へ狩りに行くとき、「行ってくるぞ」と言えば、子供達が「お
ためらい」と言い、父親を送り出します。私たちが朝学校へ出かけるときに母が言う「行っ
てらっしゃい」と同じことです。

この言葉の語源は、私の考えでは、迷うという意味の「ためらう」から来たのではないかと
思います。体や健康のことについて考えなさい→迷いなさい→ためらいなさい、というよ
うに考えれば、関係があるように思われます。

「ためらいなれ」という言葉は祖母の故郷で使われていたのですが、10年ほど前、祖母たちの
住んでいたところにダムを造るというので、その住民が全員村をはなれて散りおりになっ
てしまいました。そうすると、引越先ではこの言葉が通じないので使われなくなる、この言葉が
使われなくなる。方言というのはこういうふうにすたれていくのかと思いました。

7 方言を学習した感想

(H・T男) 金沢の方言を班で調べた時はあまり思い出すものはなかった。「グラ」「～まっし」
など平凡なものばかりでした。しかし他の班が調べたものを聞いてみると、「なんだ」なんてこ
とになった。なぜ聞くまでわからなかったかということ、それだけ自分が方言にひたっているた
めだったと思う。

それから同じ方言でもちょっと語尾がちがっている所があるのがふしぎだった。意味も同じ
なのに地方がずれると語尾も変わることがあった。こういうことに興味深くなった。

(K・H女) イジッカシイとザッカシイ……私のふとした意見がもとで、調べなくてはいけない
ことになりました。教官室へ行って聞きまわりました。結局わかったことはイジッカシイはう
るさいという意味、ザッカシイはイヤらしい意味。この二つの方言は形は少しちがうけれど同
じに使われていると思ったのに、実際調べてみると全く違うことでした。もし私が言わなかつ
たら、ずっとずっと同じ意味だと思い同じ使い方をすることでしょう。

(T・M男) ぼくは6年のときまで方言というものはあまり気にしていませんでした。でも授業
をして方言の中には一つ一つあたたかい心がはいっていることがよくわかりました。金沢地方
の表現を一人一人調べてきて発表のときは、いろいろな方言について、意味のわかることば、
分からないことば、家庭でよく使う言葉、つかわない言葉を調べ、その方言の特徴などがよく

わかった。どんな方言にもぜったい心が一つはいつているのだ。

(R・I女) とくにおもしろかったのは、中央の文化がどのように地方へひろがったかです。今ではテレビ・新聞で、アッという間に文化は広まるけれど、昔の人は口から口へと伝えたから、日本のすみずみまで広まったところに中央では別の文化が生まれていたということが分かりました。今は文化もすぐ広まるかわりに、その地方の方言などはだんだん消えてゆくので、とてももったいない。方言は共通語よりうまく人の心を表わすこともあるし、他の地方の人とあまり通じないという欠点もありますが、わたしは大切にしたい。

(O・K男) 方言を勉強して良かったなと思うことは、たくさんありますが、一番大きなことは、私たちの住んでいる地域はこの日本の中でごく一部ののだということが自覚できたことです。また、この勉強をして、家の中で母や祖父や祖母の日ごろ使っている言葉に注意するようになった。

9 授業の反省

方言を考える学習としては、語彙・語法・アクセント・発音などの全体としてとらえさせるのが本当かもしれないが、この單元ではとくに語彙を中心に自分たちの地域の方言を考えさせた。単に方言集めということではなく、どんな場面・どんな意味・どんな心で、その語が日常使用されているかという掘り下げを生徒なりにさせてみると、方言であるだけに、一般の辞書をたよるわけにゆかず、それぞれを自分で追究しようという姿勢がはっきり見られた。

現代はテレビ・ラジオなどの普及で共通語が広く浸透しつつあり、生徒とその両親の世代、さらに祖父母の世代とは明らかに方言の使用度がちがうようである。調べる過程においても、わたしたちは使わないが、という前提の発表が多かった。それに対して語法における世代の差異はあまりみられなかった。こうした実態をふまえて、今後は語法からみた特色について考えさせる学習をしてみたいと思っている。

ともあれ、日本語は地域によってさまざまの相を持つということ、方言が土地の人の心がこめられていること、地域の歴史や風土の所産であることなどの認識を深めたようだ。

実践例 ② (2年の授業から)

1 題材 「慣用句」を考える。

- 2 目標
- 「慣用句」の意味やその由来を、自分で考える。
 - 「慣用句」のもつ役割り(効果)を理解する。
 - 「慣用句」とはどんなことばか、自分なりに定義する。

3 指導の観点

これまで「類義語」、「対義語」、「多義語」の学習を通して、言葉の意味について考えてきた。日常なにげなく使っている言葉も、このような観点から見直してみると、今まで気付かなかった意味の複雑さやあいまいさを持っていることに驚かされた。この事実を認識した上で、なおかつ「ことばの意味」がもつ性質や法則性を考えてみたわけである。それは意義のある学習であった。なぜならば、それについて考えるためには、ことばを表面的な意味でとらえるのではなく、その意味の背景となっていることがらにまで考えを及ぼさなければいけないからだ。言葉への興味や関心は、そのような主体的活動を通した時にこそ、引き起こされるのではなかろうか。

ここでは、「言葉の意味」に関する学習のまとめとして「慣用句」を取り上げることにした。「慣用句」は決まり文句であり、意味が固定しているために、どうしても知識としてのみ扱われがちである。しかし、「慣用句」への興味や関心をもたせるには、それでは不充分である。むしろ、現在そのことばを使う者の立場に立って、「慣用句」の意味を自分で想像したり、一方「慣用句」の生い立ちを知るために、その由来について調べたり考えたりすることの方が大切なのではあるまいか。また「慣用句」を真に自分の知識とするためには、単独のことばとして、その意味がわかるだけではなく、さまざまな言語活動の場(聞く、話す、読む、書く)で十分に理解がなされなければいけない。すなわち、話しや文章を通して、そこに使われている「慣用句」の効果を考えることができたり、実際に「慣用句」を話しや文章の中で効果的に使いこなさなければいけない。

このように、「慣用句」を通して、自分で「言葉の意味」や「言葉の歴史」を考えたり調べたりすること、さらには自分で言語活動のさまざまな場に使えるということ。この二つを目標にして、指導を進めていきたい。

4 指導計画 (計4時限)

〈第1時限〉……「慣用句」の紹介及び興味をもたせる。

- a. 「慣用句」に関する予備知識の確認
 - 「慣用句」とはどんなことばか。
 - どんな「慣用句」を知っているか。
- b. 「慣用句」の紹介(プリント)
- c. 身体に関する慣用句を調べさせる。(どんな慣用句があり、どんな意味として使われているか)

るのか調べてくるよう、課題として与え、次時に発表することを指示しておく)

〈第2時限〉……身体に関する「慣用句」の豊富さと適切さに気付かせる。

- a. 身体に関する「慣用句」(頭、目、耳、鼻、口、胸、手、腹、腰、足の10の身体部分について、前もって分担し、それぞれ指名しておく)を発表する。
 - 「慣用句」は板書発表の形をとり、意味については口頭発表させる。
 - 他の生徒からの補充や疑問を発表させる。
- b. 「慣用句」の意味と由来を考えさせる。(プリントに8つの慣用句をあげ、その意味と由来と例文について考えてくるよう、課題として与える。また、辞典はけっして使わないよう指示しておく。)

〈第3時限〉……「慣用句」の意味の由来について考えてみる。

- a. 「慣用句」の意味と由来について、各自が考えてきた意見をもとに、グループで話し合ってみる。(6人程度のグループを作り、各グループに2つずつ慣用句をわりあてる)
- b. 各グループでまとまった意見を発表しあい、クラス全体で話し合う。
- c. 質疑応答や辞典類を参考にして、課題をまとめる。

〈第4時限〉……「慣用句」の効果を考え、さらに表現の中に生かせるようにする。

- a. 新聞や雑誌の文章から、そこに使われている「慣用句」をさがし出し、それが文中でどのような役割りを果たしているのか考えさせる。
- b. 「慣用句」を自分なりに定義してみる。
- c. 「慣用句」を採り入れた短い文章を書かせたり、スピーチをさせたりする。

5 学習展開

〈第3時限〉の場合

㉑ 使用教材

(資料1) 参昭

㉒ 学習形態

グループ学習(6～7人の7つのグループに分ける)を活用する。

㉓ 指導案

学 習 活 動	予想される生徒の反応と教師の働きかけ
1. 各グループに割りあてられた「慣用句」の意味を確かめ、その由来について話し合う。	◎プリントに挙げた8つの慣用句の中から、次の4つについて、授業で採り上げる。 <div style="display: flex; align-items: center;"><div style="font-size: 3em; margin-right: 10px;">{</div><div><div>A. 「耳にたこができる」</div><div>B. 「歯を食いしばる」</div><div>C. 「口がうまい」</div><div>D. 「油を売る」</div></div></div> ◎A～Dの中から、各グループ2つずつ割りあてる。 ◎司会者に、グループ全員の意見を聞いた上で、グループ全体の意見をまとめるよう指示する。

	<p>◎意味がわからないグループには、すぐに辞典に頼ることなく、それを使った例文を考えてみるよう指示する。</p> <p>◎由来について、考える糸口がつかめないグループには、指導者が適切な助言を行う。（「油を売る」の場合など）</p>
2. 各グループでまとめられた意見を発表する。	◎口頭発表
3. 質疑応答	<p>◎各グループの発表について、補充や疑問があれば、意見を出し合う。</p> <p>◎グループ同士、意見がかなり異なる場合には、全員で話し合ってみる。</p>
4. まとめ	<p>◎各自の国語辞典やプリント（「国語大辞典」のコピーなど）を利用して、意味や由来を確かめさせる。</p> <p>◎指導者は助言及び資料提供をする程度にとどめ、できる限り、生徒が自主的に調べたり考えたりするよう配慮する。</p>
5. 次時予告	

6 授業の記録

それぞれの「慣用句」に対するグループ発表は、次のような内容であった。

① 「耳にたこができる」

（意味） 同じことを何度も聞かされる。聞きあきていやになる。

（由来） 同じ動作をくり返しつづけていると、使っている手や足にたこができる。同様に、同じことばをくり返し聞かされると、耳にもたこができるような気がするから。

（例文） 先生や親からの「勉強しなさい」という言葉は、耳にたこができるくらい聞かされている。

（留意点） 「たこ」の意味がわからないままに、この慣用句を使っている生徒が多いようだ。グループ内のある生徒から、ペンだこや足にできるたこの例をあげてもらい、はじめて理解をした生徒が目立った。

② 「歯を食いしばる」

（意味） 努力する。頑張る。耐える。苦難に立ち向かっていく。力を入れる。くやしい。

（由来） 上にあげたような状態にある時は、自然と歯をぐっと食いしばる動作をするから。

（例文） 試合の後半に入ってから、足がフラフラになるほど疲れたけれど、チームのために歯を食いしばってがんばった。

（留意点） するめをかみしめる時の表情を連想する生徒が多かった。このことばを、実際に動作化をさせてみることで、意味や由来を実感できたようだ。

③ 「口がうまい」

- (意味) 話すのが巧みである。話し方が上手だ。お世辞を言って相手をだます。
おいしい。食欲がある。
- (由来) 話したり、食べたりする時に、最も大切な器管が口である。だから、口ということばによって、その働きである「話すこと」や「食べること」という意味を代表させているのではなかろうか。すなわち、「口がうまい」というのは、話し方が上手であり、食べていておいしいということだろう。
- (例文) ○あのセールスマンは口がうまいので、客はつい品物を買ってしまう。
○よく歩いたせいか、とても口がうまい。
- (留意点) この場合の「口」が、口という器管そのものではなく、その働きを示していることを理解させる。また、意味として「おいしい」や「食欲が進む」という意見が出たが、日常生活の中でそういう使い方をするかどうか、全員で話し合ってみるとともに、「国語辞典」で確認させることも必要であろう。
- ① 「油を売る」
- (意味) ①お金もうけをする。 ②もったない。 ③なまける。 ④時間をむだにすごす。
- (由来) ①——石油を売ると、多くの金を手に入れることができるから。
②——石油は貴重品なので、そうたやすくは売るわけにいかないから。
③——昔の油売りには、怠け者が多かったから。
④——油を売るには長い時間を要したので、根気よく待っていなければならなかったから。
- (例文) ①——私の夢は新しい製品を開発して、大いに油を売ることです。
③——いつまでも油を売っていないで、早く仕事にかかりなさい。
- (留意点) 意味については、発表された例文から考えて、③や④が適切であることを共通理解したが、由来については全員が納得できるような意見はでなかった。このような場合、指導者の助言が必要となる。「慣用句」は一般的に、昔の日本人の生活を背景にして作られていること。当時の「油売り」という職業を具体的に想像してみるよう指示することなどが手がかりとなるであろう。ある程度、意見が出された時点で、予め用意しておいたプリント（「国語大辞典」や「慣用句辞典」の該当箇所をコピーしたもの）を配布し、各自に意味や由来を確認させる。

7. 授業の反省

調べること、考えることに重点を置いた学習を進めてきた。そのため、「慣用句」を単なる決まり文句としてとらえるのではなく、そのことばの背景となっていることがらへと興味を導くことができたと思う。知的思考や想像力を働かせることによって、ことばがもつ「おもしろさ」や「複雑さ」に気付いてくれたなら幸いである。ことばには、歴史や人間の生活が刻みこまれている。ことばに興味を抱くということは、そのことばの内側にこめられた歴史や人間の生活に興味を抱くことではあるまいか。

また、ことばに関する知識は、それが実生活において生かされなければ意味がない。その表現を自分自身が話したり書いたりすることによって、本当に自分のことばとなっていくのだ。それゆえ、この教材のまとめとして、慣

用句を効果的に使った、短い文章づくりやスピーチを課題として与えた。生徒は楽しみながら、課題に取りくんできていたようだった。

できれば「単語と慣用句」、「慣用句と格言・諺」といった関係についても、漠然としてではあっても生徒に理解させておくべきだった。

8 資 料

④ 「慣用句」の意味と由来を考えるための資料 (資料1)

慣 用 句	意 味	由 来	例 文
④頭をかかえる	心配する。 困る。悩む。	困ったことがあると、人は自然に両手で頭をかかえる動作をするから。	大事なミスをした彼は頭をかかえこんでしまった。
④目が高い	センスがある。 ものごとを見抜く能力にすぐれている。	目でものごとのよしあしを判断するが多い。その判断能力が高いということ。	この服を選ぶとは、さすが彼女は目が高い。
①顔が売れる			
②耳にたこができる			
③口がうまい			
④歯を食いしばる			
⑤歯が立たない			
⑥油を売る			
⑦額を集める			
⑧根も葉もない			

⑤ 生徒の作品

◎文中に「身体表現に関する慣用句」を5つ以上入れて、筋の通った短い文章を書いてみよう。
(資料2)

作品例① Y・S (女子)

「今日はテニスの試合です。ペアの人の足を引っ張らないようがんばります。さあ、いよいよ試合がはじまりました。でも相手のボールは速く、私たちは手も足も出ません。だんだん点差がひらき『もうだめだ』と思いましたが、そんなことは口に出せません。その時、先輩がうまくアドバイスしてくれたのです。おかげで、まるで作り話のように私たちは勝てました。いつもは口うるさい先輩を悪く言っていたのですが、この時ばかりは頭の上がらぬ思いでした。」

作品例② T・T (女子)

「ここは暗くて狭いろう獄の中。みんなは俺のことを死刑囚だと、口をそろえて言いやがる。そのたびに俺の胸は張り裂けそうになる。いったい俺が何をしようのだ。腹黒いあいつらのことを思うと、まったく頭にくる。本当は殺人を犯したのはあいつらなんだ！あやうく俺は口をすべらしそうになる。しかし、すうすると……。ふっと横を見ると、窓が開けっ放

しになっている。『しめた！』俺は胸が踊った。誰がどうやって窓を開けたことは、もう頭がまわるひまさえなかった。気がつくと尻に火がついたように突っ走っていた。やがて腹がへると、木の実や草を食った。そして一晩中、足が棒になるほど歩きつづけた。

◎「慣用句」の学習を終えての感想 (資料3)

「慣用句」について K・S (男子)

「慣用句」、それは字からもよくわかるように、習慣で用いる句である。しかし、現在「慣用句」はあまり使われていないようである。しかもそれをよく知らない人さえいる。なぜ、このように便利なことばが、現在ではあまり使われないのだろうか。もう古くさいことばとして、親しみを感じなくなったのだろうか。僕はそう思わない。「慣用句」には古人の知恵があふれている。

まず「慣用句」は、人の目や耳を充分に楽しませてくれる。言いたいことや書きたいことも、そのままではもの足りない。ちょっとした味つけが、日常の生活を楽しませてくれるのではなかろうか。例えば『胸が踊る』という言葉を取りあげてみよう。人間はうれしくなると踊りたくなってくる。それを『胸が踊る』と表す。実際には、胸が踊るはずがない。しかし、そういった方が実感がこもり、気持ちがよくわかる。

又、「慣用句」は簡潔である。例えば『筆が立つ』という表現がある。「文章がうまい」という意味なのだけれども、『筆が立つ』と表現するのと、「文章がうまい」と表現するのでは、感じが全然違う。普通の表現では平凡でしまりが無い。しかし、「慣用句」の表現はさっぱりしていて引き締まっている。簡潔で人の目をひきつける——これを絶対条件とするのが「新聞の見出し」である。新聞は多くの人々に読まれる。その中で最も重要な大きな見出しに、「慣用句」がよく使われている。その大きな理由は、「慣用句」が簡潔な表現で人の目を引きつけるからだろう。「慣用句」には、人の目をひきつけるような効果があるのではなかろうか。我々はこの「慣用句」をうまく使いこなして、もっとお互いのコミュニケーションを深めるよう心がけよう。

実践例 ③ （3年の授業から）

1 題材 敬語について （文法——敬語表現の構成——）

- 2 目標
- 日本語の特性としての敬語のもつ意味と内容を考えさせる。
 - 例文などを手がかりにして、敬語表現の構成法を生徒自身が考え理解できるようにする。

3 指導の観点

これまで敬語は尊敬・謙譲・丁寧の概念をもって、これらの大きな範疇に分けられてきていた。このこと自体に問題があるのではないが、敬語の理解について、われわれ教師も生徒もただ形式的にこれらの範疇に区分けすることをもって敬語を理解したことにしてきた感がある。

しかしながら、敬語が最も日本語らしい日本語の美風としてあることの存在理由は、果してそれだけなのであろうか。「目上の人に対する尊敬や謙譲や丁寧な表現は、敬語と称される一連の語を使用することによって行われる。」ほんとうにこれでわれわれの目的は達せられたことになるのであろうか。何か納得のいかないものを感じてならない。

われわれが敬語を使う時、敬語なる語を単に機械的に操作することによって敬意の意志表現をするのでは決してない。重要なのは何よりも、話し手たる自己と聴き手たる相手があって、はじめて敬語なるものが意識され表現されるということである。

この事実を無視して敬語を語ることはありえない。

わたしは生徒に、話し手と聴き手との相互関係の認識と、その関係に対する話し手の認識の表現という観点から、敬語を考えさせたいと思う。

生徒のこれまでの敬語に対する認識と、わたしが意図する内容とのズレが、どこまで、どのような形で埋まっていくかが、この学習の重要な課題となるであろう。

（参考資料、時枝誠記『国語学原論』岩波書店、など）

4 学習展開

学 習 活 動	予想される生徒の反応と教師の働きかけ
1. 「敬語」とはどういうものか、考えを発表する。	◎生徒の大まかな意識を知る程度にとどめておく。 ・ 目上の人に対して使う。 ・ 尊 敬 ・ ていねい ・ 礼 儀
2. 身近な事から、敬語の使用例をあげる。	◎よい事例が出にくい時には、電車の車掌さんの、「切符を拝見させていただきます。」を取り上げてみる。 〔その他の例として〕

	<ul style="list-style-type: none"> ・絵を見た。 ・絵を拝見した。 ・絵を拝見 <u>しました</u>。 <ul style="list-style-type: none"> ・先生から本を<u>いただく</u>。 ・先生から本を<u>いただき ました</u>。 ・先生が本を<u>くださる</u>。 ・先生が本を<u>ください ました</u> <p>(・素材と話し手との関係。 ・聴き手との関係。)</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> それぞれの表現のちがいから、どのようなことが理解されてくるだろうか。 </div>	
3. 例文の表現上のちがいから、理解されることがらを考える。	◎理解のしにくいような時は、図式化してみる ことなどを提案してみる。 ◎文末表現によって、話し手の聴き手に対する敬意の表れることに留意する。
4. 考えたことを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・(図式化の例) <div style="text-align: center;"> <p style="text-align: center;">(話し手) <u>ください</u> ました。 (聴き手) <u>いただき</u> ました。</p> </div>
5. 学習のまとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・理解したことをノートにまとめる。
6. 次時について。	<ul style="list-style-type: none"> ・敬語の応用。

5 学習記録

T₁ 「敬語」ということばを聞いて、どんなことを感じますか。

P₁ 相手を敬うことば。

P₂ 目上の人に対するあいさつ。

- P₃ 感じがよい。
P₄ 礼儀正しい感じがする。
P₅ 固苦しい感じもする。
P₆ あいさつの時に使うことば。
P₇ 皮肉を言う時に使ったりする。たとえば、友だちなんかの発言に対して、「ご立派なご意見ですね」などと、…………。
T₂ どんなふうに敬語を使うか言ってみてくれませんか。

(あまり意見が出ない。)

⋮

たとえば電車の中で車掌さんなんか切符を調べに来ますね。聞いたことある？ どんなふうに言っていますか。

- P₈ まことに恐れ入りますが、切符を拝見させていただきます。
P₉ 乗車券を拝見いたします。

(その他はほとんど同じなので省略する。)

- T₃ 「切符を拝見させていただきます。」という場合、どの部分が敬語表現だと思いますか。
P₁₀ 拝見させていただきます。

(その他、同意見多し。)

- P₁₁ 「拝見させていただきます。」は、ちょっとていねいすぎるような感じがする。「拝見します。」だけでもいいんでしょう。
T₄ そうだね。「拝見させていただきます。」は、ちょっとていねいすぎるようですね。
P₁₂ でも、普通は「拝見させていただきます。」と言うよ。「拝見します。」だとかえって冷たい感じがするんじゃないの。
T₅ 他の人の意見はどうか？

(P₁₁ と P₁₂ の意見に賛否両論がある。多くは P₁₂ の意見の方に近いようである。)

<中 略>

- T₆ 「拝見させていただきます。」は普通簡単に言うかどうかということばで言うの？
P₁₃ 「見させていただきます。」
P₁₄ 「見る」、「見ます」
T₇ 「見る」ということばで例文を書いてみるから考えてみてください。

(例文) 絵を見る。

絵を見ました。

絵を拝見する。
絵を拝見しました。
絵を拝見させていただきました。

どの部分が敬語表現だと思いますか。

P₁₅ 拝見する。

拝見しました。

拝見させていただきました。

(「拝見」という語に気が引かれて、「見ました」に関心はないようである。)

P₁₆ 「拝見する」の場合がどうも分かりません。

P₁₇ 「拝見」という語が敬語なのでしょう。

P₁₈ 「拝見しました」とか「拝見させていただきました」というのは、誰かに言っているよう
だし、「拝見する」は第三者の時に使うのではないかな？

(「誰かに言っているようだ」という、聴き手を意識した発言が出てきた。これをもっと展開させてみたい。「見る」、「見ました」の場合について問いかけてみた。これも同様だと言う。みんなは考え込んでいる。よく考えが進んでいっているようなので、無理をせずに自然な形で展開させたいと思う。)

(しばらく待つ。)

⋮

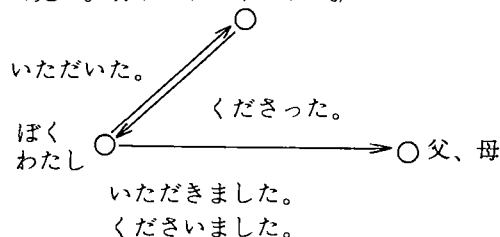
(やっぱり、考えがまとまらないようである。)

T₈ 「いただく」ということばでも、「先生から本をいただく」という場合は、ちゃんとした敬語表現ですね。それは、「先生から本をいただいた。」でもいいわけですね。それと「先生から本をいただきました。」は、もっとていねいな言い方ですね。このちがいが大きいのではないかと思うのだが、…………。

P₁₈ 君の意見をもう少し深めてまとめてみたらどうだろうか。

P₁₉ 「いただく」という場合、自分がもらったという場合は、「いただいた」でもよいが、それを誰か目上の人なんかに言う時は、「いただきました」と言うような気がする。

(図に書かせて見る。若干アドバイスする。)



P₂₀ ていねいな言い方は、その人の心のあらわれのようにも感じられる。

(「心のあらわれ」などという深い考えがでてきたのに驚かされる。)

P₂₁ 自分だけの場合とか、身内のものの場合には、あまりていねいなことばや敬語は使わないから、ぼくもそうだと思う。

P₂₂ でも、母親で自分の子どもなんかに、「おりこうね」なんて使っている人もいるよ。「おりこう」は、「お」がついているから敬語でしょう。

P₂₃ でも、「りこうね」なんてあまり使わないんじゃない。やっぱり自分の子どもでも「おりこうね」でいいと思うよ。

(思わぬ方向へ行きそうだが、大切な問題なので、しばらくこのまま様子を見ることにする。)

P₂₄ たとえば、子どもづれの女の人なんかが、「この子にも風船あげてちょうだい」なんて言うけど、これは女の人だからていねいに言っているのではないかと思う。

P₂₅ 公園などの池のところに、「コイにえさをあげないでください」なんて立札に書いてあるのなんかも、相手の心を考えて言っているのではないかと思う。

(ここで、「相手の心を考えている」ということばがまた上がってきたので、ホッとする。)

T₉ P₂₀ 君とP₂₅ 君の意見で、敬語は「心のあらわれ」とか、「相手の心を考えて使う」ということが言われていましたね。それにP₁₉ 君の図なども参考にして、自分の考えをそれぞれノートにまとめてみてください。

(ノートに考えをまとめる。)

6 授業の反省

我田引水の感の強い学習内容であったが、生徒はうすうすながらも敬語のもつ意味を理解していったようであった。

即ち、「指導の観点」のところで述べたように、敬語を単に、尊敬・謙譲・丁寧の大きな範疇に区分するという、形式的なものとして扱うのではなく、敬語は、そのことばを使う人間相互の関係認識を表現しているという、生きた言語として理解できたといえるであろう。

学習中、敬語を「皮肉を言うために使う」という意見なども、身近に生きた言語活動を通じての発言であったと思う。

また、やや学習の本スジからはずれるような感のあった、自分の子どもに「おりこうね」という使用法や、池のコイに「エサをあげないでください」

などの使用例は、最も日常的なものとして、われわれが接する表現である。

これらの表現なども、形式的に見れば、敬語の誤った使用例ということになりやすいのだろうが、生徒たちが考えたように、その人の相手の人に対する「心のあらわれ」として考えてみれば、一概に間違った使用法ときめつけることは一考を要するかもしれない。

指導する教師の側にいくつかのあいまいな問題点がありながらも、生徒たちは実によく考えてくれたと思う。

教師の側のあいまいな問題点としては、「敬語の表現」という抽象的な課題を掲げながら、その内容を明確にしておかなかったことにある。故に、生徒も焦点を絞った形で考えを展開することが難しかっただろうと、深く反省される。